

⑤3 彦二郎

山の奥に住む大蛇には神通力があつた。自分の体を大きくしたり、小さくしたり、自由自在やつた。

昔々、小坂（河和田町）に彦二郎といつても勇気のある人がいた。春が来て田植えを終えると、いつもの年のように一人で大野郡の山まで漆かきに行つた。

彦二郎が山の奥へ入つて行くと、針金のよう細い蛇がうしろをついて来る。どこまでもついて来る。彦二郎はピンときた。そして蛇にいつた。

「お前は本当は大蛇やろ。大蛇はぐつと小そうもなれると聞いているが、まだ見たことはない。本当かどうかいっぺんおれの手の上につけて、梅干みたいに小そうなってみてくれ。」



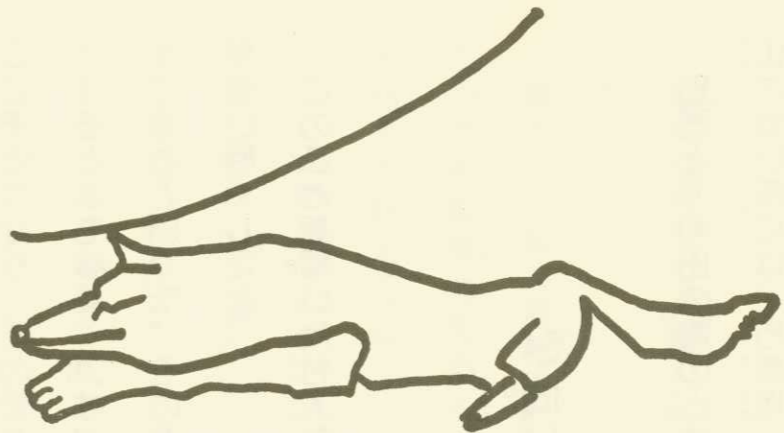
すると、蛇はさし出された手のひらにのつて、本当に梅干のように小さくまるまった。彦二郎は「いぞとばかり、その蛇をぱつと口に入れてかみくだいてしまつた。するとまもなく、ゴオツというものすごい地鳴りがして、山のような大蛇の死がいが谷底へ転がり落ちていつた。そのあと、彦二郎のからだからは、沢山の小さな蛇が出てきたが、それを全部食い尽くしたと。」

このことを聞いた村人たちは、彦二郎のことを鬼彦と呼ぶようになったそうなの。

⑤4 向い山の古ギツネ

別司と河和田の南の山は八幡山やけど、たいていは「向い山」つていつている。

山の低い所には、朽飯坂、猫坂つていう服間へ行く峠道があつて、昔はけっこう人が行き来してたんや。この向い山に大きな古ギツネが棲んでいて、ちよくちよく人をだましてたんやと。



ある日のこと、朽飯の神主さんが金谷の祭りによばれたんで、朽飯坂を越えてやってきた。峠のお地藏さんをおがんで山道をおりかけると、道端にキツネがぐうぐうねむりつけてたんやと。「いや、人間さまをだます古ギツネやな。ちよいとおどかしやろ。」

神主さん手に持ったほら貝をキツネの耳にあてて、思いつきりブーと吹いたんで、キツネはびっくり仰天、こそこそ山の奥にかくれてしもうたんやと。

神主さん、してやったりと笑てるうちに、あたりが真っ暗になつてしもた。

と、むこうに一つだけ家のあかりが見えている。そのあかりをめざして行くと、おばあさんが一人で住んでいた。

「今夜ひとばん泊めてくださらんか。」

「今夜は主人が死んで、まだなきがらが家においてあるけど、ほんでもいいけえの。」

神主さん、どうしようもないので泊めてもらうことにしたんやと。

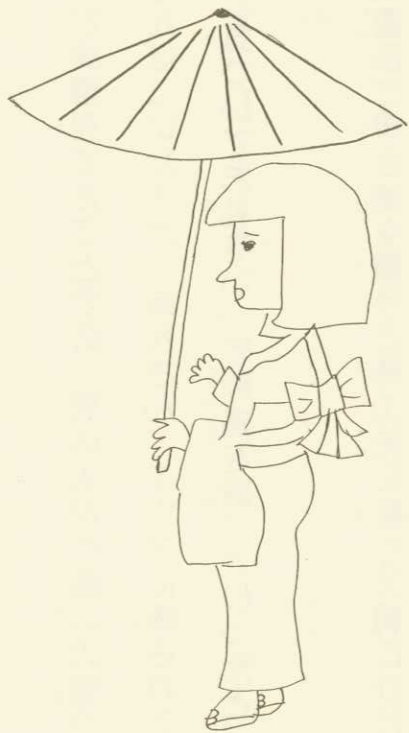
おそろおそろ死がいのそばにすわっていると、死がいがズイ、ズイと神主さんに近づいてくるんや。おそろして一歩また一歩あとずさりすると、急にザボン！ 神主さんが我にかえると、あたりはまっ昼ま。お百姓さんが田んぼでせつせと働いていた。自分は橋からおちて、大川の中でしりもちついていたんやと。

これは今から八十年ほど前に、うちの親父さんが実際見たことでの。男の人が朽飯坂の登り口あたりを何んも行ったり来たりしている。田んぼにいた人が「あんさん、キツネに騙されていなさるんやないけの。」と声をかけるよ、はっつ気づいてお礼をいって峠道を登っていったよ。

次もその頃の事や。晩方仕事ですんでから、清喜屋で焼き鯖を買って棒の先に結わえ肩にかけて朽飯坂を越えた。

服間の親類に着いて、土産を渡そうとしたら魚がない。  
キツネにしてやられたとしか思えんと。

今度はちょっとこわい話やでエ。むかし  
次郎平さんという大工がおつての。赤坂に  
仕事にかよっていた時、何べんもキツネに騙  
されていたんやと。



ある雨の晩方、仕事帰りに傘をさした娘に声をかけられた。

「暗うなってしもつておとろしい。どうぞ一緒に帰っておくんはない。」と。

二人つれだつて大川を渡るときに、娘はチャピンチャピンとほんの小さな足音しかさせんのや。  
こいつはキツネや、もう騙されんぞと大工は仕事道具のみで後ろから娘を突いた。キツネは逃  
げて、はさ場のかげで死んだが、虫の息で「これから七代かかってお前の家を亡ぼしてやる。」  
とつぶやいたそうや。

### 55 お地藏さん

まるい頭に穏やかなお顔のお地藏さんは、とても親  
しみ深い仏さまだ。山あり、谷ありの河和田には、峠  
や道端、しょうずにと大勢いらつしやる。



寺中の悦相院(時宗)と尾花の長禅寺(禅宗)では  
六体揃った六地藏さんが参詣者を出迎えてくださる。

人間は、あの世で地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道のどれかに生まれ変わる。それぞ  
れの世界にいて、我々を導いてくださるのだ。

筋生田の辻堂さんのお地藏さんは、真っ白いお顔に極彩色の衣装をまとうていらつしやる。七月  
二十三日の地藏まつりにお目にかかれるのだ。

寺中には、経石が土の中から沢山出たので建てられた法華経供養のお地藏さんが、さんまいの  
入り口に。